

令和 2 年 度  
宮崎国際大学 教育学部  
A0入学選考(第 1 回)

試 験 問 題  
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題 五木寛之氏は次の文章の中で「昔の人、とか、今どきの人、というふうにとくりにするのは間違いだろう」と言っています。なぜ「間違いだ」と言っているのでしょうか。また、あなたは自分の存在がどのようにして形成されたと考えますか。800字以内で述べて下さい。

#### 五木寛之(作家)

最近の若い人は、などという言い方をしばしば聞くことがある。

世代のちがいがいというものは、たしかにあるものだ。しかし昔の人、とか、今どきの人、というふうにとくりにするのは間違いだろう。

本の出版の仕事を担当してくれた若い編集者がいた。大学を出て数年しかたっていない新人である。仕事のほうは少し頼りないが、感心したことが一つあった。

原稿が一段落ついて、街の食堂で一緒に夕食をとったことがある。ちょうど秋刀魚(さんま)の季節で、焼魚定食にしたのだが、びっくりする位に箸(はし)さばきが綺麗(きれい)なのだ。食べ終えたあと、魚の骨が標本のように見事に皿に残っている。

「若いのに、魚を上手に食べるなあ」と感心したら、照れくさそうに笑って、

「母親が魚の食べ方にうるさかったものですから。なんでも祖母から厳しくしつけられたんだそうです」

「なるほど。おばあちゃんゆずりの箸さばきか」

そのときふと思ったのは、最近なにかと話題の多い、相続(そうぞく)という問題だった。

このところ雑誌や新聞、またいろんなセミナーなどで相続をテーマにしたものが、やたらと目立つようになってきた。もちろん親から子への遺産相続の問題である。

団塊(だんかい)の世代数百万人が、一斉に後期高齢者の仲間入りをする日が近づいているのだから当然だろう。

しかし、相続というのは、はたして土地や金銭だけのものだろうか。

私は両親から何も相続しなかった。借金を相続しなかっただけでも幸運だったと、ひそかに思っている。

しかし、よく考えてみると、不動産や動産以外の、つまりモノ以外のいろいろなものを受けついでいることに最近気がついた。たとえば喋り方。

私の両親は福岡県の筑後(ちくご)地方の出身だった。そんな家庭に育ったせいで、私の言葉づかいにはその地方のアクセントやイントネーションが、はっきりと残っている。

父親からは詩吟と剣道を教わった。いまでもふと漢詩の一節を口ずさんだりするのは、父から相続したものである。

本を大切にされた父親は、子供の私が本をまたいで通ったりすると、ぴしゃりと足を叩(たた)いたりした。読みさしの本のページを折るのを(ドッグ・イヤー)とって不作法なことだと教えてくれたのも父である。

母親から受けついだのは歌や音楽を楽しむことだった。オルガンが上手な女教師だった母は、西条八十(さいじょうやそ)や北原白秋、野口雨情(のぐちうじょう)などの歌をたくさん教えてくれた。軍歌全盛の時代にである。残念ながら魚の食べ方は教わらなかった。

あげていけばきりが無い。私たちは目に見えない財産を、山ほど両親から相続して生きているのだ。不動産や貯金だけを相続するわけではない。喋り方から箸の持ち方までを受けついでいると言っていい。考えてみれば、歴史というもの、そうなのではあるまいか。

（「私たちが相続するもの」宮崎日日新聞 H31年4月21日）

令和 2 年 度  
宮崎国際大学 教育学部  
A0入学選考(第 3 回)

試 験 問 題  
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題 次の文章は NHK の朝ドラ「半分、青い」で話題を呼んだ脚本家北川悦吏子さんが「14歳の君へ」あてて書いたものです。あなたにとって「国語」（言語）はどのような必要性を持つものなのか、また、将来教師（小学校・幼稚園等）として国語の重要性を子どもたちにどのように伝えて行きますか、800字以内で述べて下さい。

北川悦吏子(脚本家)

国語の授業なんてちっとも面白くないと思っている人は多いと思います。

「なんで、こんなしちめんどくさい、四角四面な文章を読んでなきゃいけないんだ」と国語の教科書を広げて思っているかもしれません。

そもそも、人は強制的に人に与えられた文章がきらいです。

試験では「この文章は何を伝えているか？ 何が正しいか」と聞いてきます。間違ったことを答えれば、バツェンがつけられて、点数も低いわけです。

日本人なのに、日本語が分からないなんて、自分が日本人であることを否定されているような気がするかもしれません。

これで「好きになれ」という方が無理です。

友達とおしゃべりしていた方が、LINE（ライン）をしていた方が、ユーチューブを見ていた方が、漫画を読んでいた方がよほど楽しい、と君たちは思っているに違いありません。

しかし、みなさん。ところがね、LINEもユーチューブも、漫画も、みんな国語なんです。日本語です。英語で見てる人は知りませんが…。日本語で成り立っているんです。すべての、そもそもの発端は言葉、国語なんです。

国語というものは、実は、みんなが普段使っています。起きてから寝るまでに何言、言葉を発するか分からないけれど、これはすべて国語です。日常と、国語という教科は地続きなんです。

数学や理科や社会よりも、ずっとずっと身近なものなんです。国語って。

友達と話す、親と話す、知り合いと話す。そういうのはみんな国語です。

あたりさわりのない会話をしているうちは、国語力はそんなには、いらないだろうと思います。何か欲しい、あれが食べたい、あれはきらい、これは好き、と言っていけばいいです。そう、言葉を覚えてたての子どものように。

しかし、みなさんは成長します。年を重ねます。大人に近づきます。

すると何が起きるか、というと、世界が広がります。社会が広がるんです。そして、いろんな感情がその心にわき上がるようになります。

それが、人が成長する、ということなんです。その時、「言葉」があなたを手助けします。絶対に。

今、自分が何を感じているか、何をどうおかしいと思うか、何が問題なのか、それを言葉にできれば、みなさんは救われていきます。まず、自分の抱えたことが、明確にできるから。言葉は生きるのに強力な武器となります。

君が何かを言えば、友達は返してくるでしょう。「それについて、おれはこう思う」「私はこう思う」、その時も、その感情を、その思いを言葉にするには国語力というべきもの

が必要になってきます。

そのためには訓練が必要です。言葉を使って、考える癖をつけておかなければ、自分の気持ちを言葉にして相手に伝えることはできません。

なにかひどい目にあっても、クレームひとつ、うまく言えないかもしれない。理不尽な目にあった時に、正当な反論もできないかもしれない。言葉を持たなければ、泣き寝入りをするかもしれない。

言葉は知性です。

言葉は必ず、あなたを守ります。そして、人生を豊かにします。「ぼくはこう思う」とうまくしゃべれた時の爽快（そうかい）感はたまりません。

「でも、私はこう思うよ」と友達に返された時、今まで気づかなかった結論にたどり着くこともあります。

それは、意外だったら、楽しく笑えるでしょう。深い真実にたどり着いたら、しみじみと友達とのきずなを深めることができます。

国語は、やっておいた方がいいです。四角四面の面倒くさいと思える教科書の中にも、自分の言葉の数を増やすチャンスがキラキラと輝いています。言葉を身につけて、あやつって、より豊かな人生を手に入れてください。

(宮崎日日新聞 2019年1月31日)

令和 2 年 度  
宮崎国際大学 教育学部  
A0入学選考(第5回)

試 験 問 題  
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題 「読み聞かせ」は保育所や幼稚園はもとより、小学校でも読書の一環として低学年で行われています。次の文章を読んで、あなたは「読み聞かせ」の「こころ」（精神）はどんなところにあると思いますか。また子どもたちに「読み聞かせ」をする時、どのような姿勢（心構え）で望みたいと思いますか。800字以内で述べて下さい。体験をまじえても構いません。

（注：長文のため、一部省略してあります）

おしどり マコ（芸人・記者）

（略） 本は借りるもの、廃品回収のときにもらうもの、古本屋さんで買うもの、という生活だった私が、初めて、お小遣いをためて買った本があります。『はるかな国の兄弟』という本です。このタイトルを書くだけで、自分の最も重要な約束を漏（も）らしているようで緊張します！

リンドグリーン作『はるかな国の兄弟』は、図書館で借りたあと、すぐにもう一度借り、何度も何度も借りたあと、この本を手放したくない、ずっと一緒にいたいと思って、近所の本屋さんに注文しました。ハードカバーでケースもついていて、そうっと持って帰ったあと、机においてじっと見ていたのを覚えています。その後、私は枕の下にこの本を入れて眠り、祖母の家に泊まりに行くときも、どこに行くときも、持ち歩いていました。

『はるかな国の兄弟』はヨナタンとカールという兄弟の話。兄弟はものがたりの冒頭に死んだあと、はるかな国ナンギヤラに行きます。そしてそこでいろんなことがあって、また死ぬのだけど、ナンギリマに行く光の中で終わります。ヨナタンとカールも大好きだけれど、何が私の中に入ってきたかという、「ナンギヤラ」です。私も死んだ後、ナンギヤラに行くこと決めました。そして私の大好きな人にも伝えて、ナンギヤラで会う約束をせねば、と思いました。

母に急いでこの本を読ませました。読み終わった、という母に「もし、私が死んでも大丈夫だから、ナンギヤラで会えるからね、ママが死んでもナンギヤラで会おうね！」と言いました。そう、この約束をしていくためにこの本を手に入れることが必要だったんです！

この約束は時々繰り返し話していて、小6の頃かな、母と大喧嘩（おおげんか）して学校に行くとき、口をきかずに家を出る最後、「もし、このまま離れていたときにどちらかが死んだりしても大丈夫だからね、ナンギヤラで会えるからね、気にしなくていいからね」と言ったそう。母は今でも「あのときは、娘に負けた……と思ったよ、自分が意地張ってるのに気付かされて」と言っていました。

中学、高校になってからは『はるかな国の兄弟』を持ち歩かなくなりましたが、ナンギヤラは私の中にずっとありました。そして、また巡り合ったのが大学するとき（鳥取大学医学部生命科学科に入りましたが、優秀な成績で三年で中退して芸人になりました）。医学部の授業で『死ぬ瞬間——死とその過程について』という本が出てきます。キュープラー・ロスが終末期の方々にインタビューしたもので「死に行く者の過程」は、否認、怒り、取引、抑うつ、受容の五段階ある、ということが書かれています。そのインタビュー中、北欧の小さな女の子が病気で亡くなる直前に、母親にナンギヤラの話をしているのです！ナンギヤラで会えるから、と。心配しないで、と。そして母親は小さな娘が亡くなったあと「あの子とはナンギヤラでまた会えるから。今は少し寂しいけど」と。ああやっぱ、ナンギヤラと決めた方々がおられるなあ、私もこの親子とナンギヤラで会うかもなあ、と



実家の母に電話して、大学の授業の本でナンギヤラが出たことを伝えました（今、手に入れた『死ぬ瞬間』を調べたらナンギヤラの記載が無い！でも私が授業で手にした後に出了た改訂版だからかな？また調べなくては！）。（略）

そして！母以外に『はるかな国の兄弟』をお読みなさい！と手渡したのは、漫才の相方であり、連れ合いでもあるケンパルです！けれどなかなか読み進まない、なぜ？すると衝撃の告白をされるのです、「僕は字を読むのが苦手で、一度も本を最後まで読んだことがない」。え!! そんな三二歳（結婚当初）初めて見た！

ケンパルは字を読むのも書くのも苦手。小さいときから本を読むのが好きすぎて「本ばかり読みなさんな！」と怒られていた私には衝撃でした！字を読むのが苦手、ということで、私が漫才台本を書いても、読むことができず、口述で覚えるというやり方。どうもケンパルは、ディスクレシア（識字障がい）のようでした。書くのも苦手で、鏡文字を書いたり、ひらがなとカタカナが混じっていたり。字を形や模様として捉えてしまい、文字と認識するのが難しいようでした。でも彼はパントマイムや針金の造形に優れた才能を発揮していて、形を捕える脳の仕組みが違っているのだなーと面白いんです！

「あのさー「ね」と「れ」と「わ」って区別つきにくいよねー」

「大丈夫」って漢字、ほとんどバリエーション違いだよねー」

彼の文字に対するコメントは興味深くて、せっせと収集しました！

文字が苦手なケンパルの最大限の意思表示は手紙を書くこと。「マコちゃんへ」の「ちゃ」が、「ち」の横に小さい「や」でなくて、小さい「ち」が並んでいて、これ、どう読むの？と聞いたら、小さい声で「ちゃ」って、小さい何やったっけ？」と聞くケンパルが可愛らしくて たまりません！間違いなく、ケンパルが書いた手紙は私宛てが最も多かろう、と思いながら、『はるかな国の兄弟』を読ませて、ナンギヤラで会う約束をせねばなりません！ていうか、本を読まない、というのは、人生が半分以下になってしまうような勿体ないこと！どうすればよいの？

まず私は読み聞かせをしました。毎晩寝る前。ケンパルが熱を出して寝込んでいるときはずっと。ファージョンの『ムギと王さま』や『天国を出ていく』は小品集だから最適でした！そして頭の回転が速くなるよ！と簡単な文章の速読を毎日一緒にして。二年くらい経って、これ面白いから読んでみて？芸人の勉強にもなるよ！と渡したのが『月なきみそらの天坊一座』（井上ひさし著）。

泣いたり笑ったりしながら、ゆっくりゆっくり読んだケンパル、「僕、生まれて初めて本を一冊読めた！もっと僕が読んだらいい本教えて」と欲が出た彼にすかさず、本が読めるということは、いろいろな方の考えや物語を、直接話を聞かないのに手に入れられるということだよ、と言い、様々な本屋さんや図書館に行って「ほら、ここにあるたくさん本は、古いもの新しいものもたくさんあって、ケンちゃんが知らないことばかりなんだよ！それを選んで持って帰ったら、ゆっくり読めるんだよ！」と言うと、うわあ!!と目が輝きました。今のケンパルは、速度は遅いけど、いろんな本を読んでいます。常にカバンに読みかけの本が入っているという成長っぷり！ケンパルは確実に読むことが、読んで自分の知らないことを知ることが大好きになりました！そしてゆっくり読むケンパルは、私が超スピードで読み飛ばしてしまう部分に、丁寧に泣いたり笑ったり感じ取っています。彼の読み方も勉強になるなあ！そしてケンパルのお気に入りの小さい本屋さん

がいくつかあって、彼によると「本屋さんの本の顔が全然違う。選ばれて胸張ってる感じ」  
だそう。 (略)

(「はるかなるナンギヤラ」『図書』岩波書店 2019 年 5 月号)